森林景観整備シリーズ

第７回

シークエンス景観に配慮した整備について

技術士（森林部門）　由田 幸雄

はじめに

景観（眺め）は、大別すると視点を固定したときの眺め（シーン景観）と視点を移動しながら見る眺め（シークエンス景観）の２つになります。両者の違いは、視点（見る位置）が固定されているかそうでないかです。すなわち見る人が立ち止まって見る眺めなのか、それとも移動しながら見る眺めなのかです。

本シリーズでは、これまで視点が固定されているときの眺め、例えば展望台等から見る眺めを対象とした景観整備について説明してきました。

今回は視点を移動させながら見る眺め（シークエンス景観）に配慮した整備について説明します。具体的には、山地の歩道では、どのような整備するとよいのか、ということです。

１ シークエンス景観の特徴は何か

それは、①同じような眺めが続くと単調さを感じる、②眺めに変化があってもそれが大きな変化でないと印象に残らない、ということです。

これらについて具体的に説明します。

1.1 同じ眺めが続くと人は単調だと感じる

同じような眺めが連続すると人は単調だと感じ、それが 5～6 分続くと退屈感を覚えるそうです。例えば山道を歩いていて同じような眺めが続くと私たちは単調だと感じますが、これは山地だけでなく都会でも体験することがあります。

写真１は、明治神宮の南参道からの眺めです。まっすぐな参道がずっと先まで続いており、しばらく歩いてもこの眺めは変わらないので、初めて訪れたときは単調だと感じ、先が見通せない場合はどこまで続くのかと思います。単調な眺めとならないようにするためには眺めに変化をつける必要があります。

写真１　明治神宮南参道からの眺め

1.2 小さな眺めの変化は印象に残らない

眺めに変化をつける方法としては眺められる対象の樹林に変化をつけることが考えられます。しかし、これは大きな変化とはならないので、あまり印象に残らないのです。具体例で説明します。

写真２の２枚は山地の散策路から撮ったも

のです。（上）の写真では広葉樹林が、（下）は針葉樹林が見えています。明らかに、林相は異なり、眺めも違います。しかし実際に歩いてみると、この林相の違いはあまり認識されず、印象に残らないのです。なぜ印象に残らないのかというと、針葉樹林と広葉樹林はともに「樹林」として大きく括られて記憶されてしまうためです。眺めに違いはあるが、それらはともに樹林として記憶されるので印象に残らないのです。変化に富んだ、印象に残る眺めとするためには、眺めに大きな変化が必要なのです。

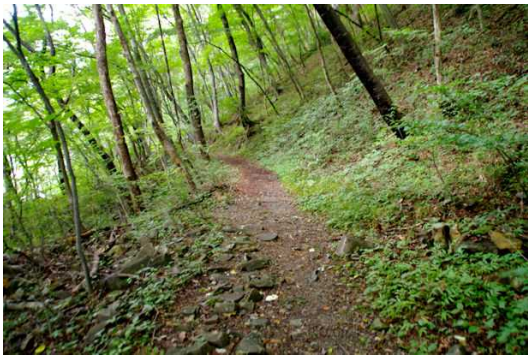

写真２　広葉樹林と針葉樹林の眺め

1.3 眺めに大きな変化があると印象に残る

明治神宮の参道からは同じような眺めが続きますが、しばらくすると眺めに大きな変化が生じます。**写真 3** がそれです。突然大きな鳥居が現れるのです。大鳥居の眺めはそれまでとは全く違うので、大変印象的です。また、ここでは突然現れることによって、より印象深いものにしています。眺めの変化があらかじめ予想されていない場合は印象が強まります。大鳥居が突然現れるのは、参道の曲がり角から少し奥まったところに立っているからです。

写真３　大鳥居の眺め

この大きな変化が突然現れる事例として私（筆者）が最も強く印象に残っているのは金閣寺（鹿苑寺）の金閣の見せ方です。

写真４は、金閣寺の入口から少し歩いたところでの眺めです。この眺めが少し続きますが、塀の途切れたところ（人の多くいるところ）にくると、突然視界が開けて目の前に**写真５**の金閣が出現します。この突然の場面転換は全く予想されていないので、高校生などの団体客は、思わず「おっ、すごい。」などと歓声をあげるほどです。

写真４　金閣寺参道からの眺め

このように眺めに大きな変化があって、それがあらかじめ予想されていないときは、その印象はより強くなります。

写真５　金閣の眺め

以上のことを図で単純化して説明します。

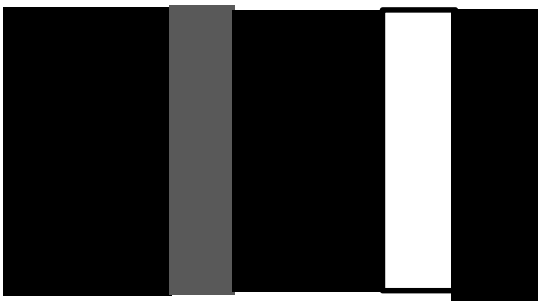

図１　進行とともに変わる眺め

図１は人が移動したときに見える眺めを時間の経過順（左から右）で単純化して示したものです。はじめは黒色の眺めが続きますが、次にグレーの眺めがあらわれます。この眺めはそれまでとは少し違いますが大きな変化とは感じられません。さらに進むと白色の眺めがあらわれます。この眺めはそれまでとは大きく違うので強く印象に残ります。

以前（本シリーズの第３回）、シーン景観では「図」（見たいもの）と「地」（背景）の関係をつくることが重要だと説明しました。シークエンス景観でも時間軸（時間経過）の中で変化の大きい眺めと変化の少ない眺めの関係をつくる必要があります。

これを明治神宮の場合に当てはめると、黒色の部分は樹林の眺めであり、白色の部分は大鳥居の眺めになります。

２　山地で眺めに大きな変化をつけるにはどうすればよいのか

山地では大鳥居のような人工物を設置するのは難しいので、樹林を対象にして大きな変化をつけることになります。その事例を２つ紹介します。

一つは道路沿線にある大木の強調です。もう一つは混交林の造成です。

2.1 大木の強調

この事例は道路沿線にあるアカマツの大木が見えるようにして眺めにアクセントをつけたものです。

写真６の２枚は、その大木が見えるよう、整備した前後の状況を比較したものです。

写真６　道路沿線の大木の強調

（上）の整備前は樹木が多く暗い空間になっていました。この突き当りにはアカマツの大木がありましたが、まわりにある広葉樹（クリやミズナラ等）によって見えなくなっていました。（下）は、それらの広葉樹を取り除い

た後に撮ったものです。アカマツの大木が見えるようになり、また暗かった空間が見違えるほど明るくなりました。なお、この整備は道路沿線に１本しかない、被圧されていたアカマツを保護するためでもありました。

2.2 混交林の造成

これは歩道沿線にあるカラマツ林にシラカンバを導入し、混交林を造成した事例です。

写真６（上）の写真は、歩道沿いにある混交林を撮ったものです。(下) は歩道から林内を撮ったものです。黒い樹幹（カラマツ）と白い樹幹（シラカンバ）が見えています。

写真７　混交林の眺め
（上）歩道からの眺め（下）林内の眺め

この混交林は、人工的に造成されたものです。通常は見られない眺めです。シラカンバがカラマツ造林地に侵入してきたときに、シラカンバを除伐しないで、カラマツを間伐してシラカンバを保護したのです。そうしたのは、この歩道は多くのハイカーに利用されていたので、森林を管理している日光森林管理署が景観に配慮して造成したものです。確かに白い樹幹は目立っています。

以上、2 つの事例を紹介しましたが、それぞれの整備には難しいこともあります。大木の強調では、そう大木はないので実施できる箇所は限られます。混交林の造成はカラマツの間伐を繰り返せばよいのですが、成果が得られるまでには長期間を要します。それではどうすればよいのでしょうか。

３　樹林の外側にある別なものを見せる

明治神宮の参道は森の中にあるので、まわりを大きな樹木で囲まれています（**写真７**を参照)。そのため昼間でも薄暗い空間になっています。

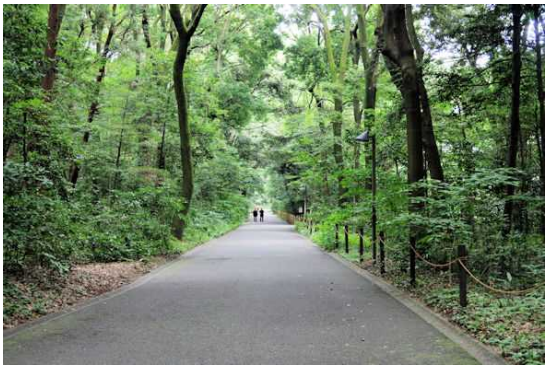

写真８　少し狭い参道からの眺め

しかし、西側にある参道を歩いていると突然この眺めが一変します。**写真８**がそれです。目の前に草地が大きく広がり、明るい空間が現れるのです。草地の奥には樹林が、そしてその奥にはドコモタワーが見えています。これは、それまでの眺めとは全く違うので強く印象に残ります。特にドコモタワーは草地と空を背景としてひときわ目立っています。このように樹林の外側にある別なものを見せることによって眺めに大きな変化をつけることができます。

写真９　参道からドコモタワーをのぞむ

明治神宮では、広大な草地があるのでドコモタワーを見ることができますが、平地林ではこれは難しいです。しかし、山地では傾斜があるので歩道沿線の樹木を少し取り除く、いわゆる眺望伐採を行うと、山や湖、道路、市街地などが見えるようになります。

図２はそのことを模式的に示したものです。

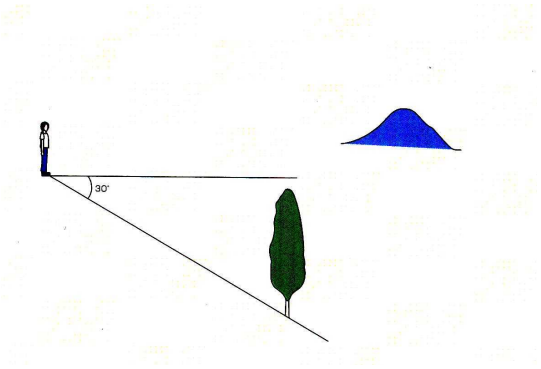

図２　眺望伐採により山などを見せる

図２は視点（人のいる位置）前方が急傾斜（30 度）の場合、前方にある樹木を少し取り除くだけで山が見えるようになることを示しています。

山地の歩道も写真７のように、まわりを樹林で囲まれています。歩くと同じような眺めが続きます。そういう中で眺められる対象の樹林に手を加えても、眺めに大きな変化をつけるのは難しいのです。しかし、歩道沿線に視点を設けて、いわゆる眺望伐採を行い山や人工物が見えるようにすると眺めに大きな変化をつけることができます。このことを実施事例でもって説明します。

４　山地の歩道からの眺めに大きな変化をつける

ここでは栃木県日光市藤原地区の散策コースで実施した事例を紹介します。

写真 10 の２枚は歩道沿線に視点を設けて、そこから鬼怒川の淵が見えるよう、整備した事例です。（上）の写真は整備前の歩道からの眺めです。歩道のまわりは樹木で囲まれています。この写真では歩道線形が分かりにくいのですが、歩道は正面のやや太い木に向かっており、そこで大きく左に曲がっています。

写真 10　眺望伐採による」眺めの変化
（上）整備前（下）整備後

（下）の写真では正面奥に水面（鬼怒川）が見えており、眺めに大きな変化が生じました。山地の歩道は直線部分が少なく、曲がり

が多いのでこのように突然、正面奥に大きな眺めの変化をつけることができます。

写真 11 は視点位置（太い木のあるところ）から撮ったものです。水面と淵がよく見えています。薄暗い歩道を歩いてきた人は、ここで突然視界が開けてこれまでとは違った眺めが見えるので、印象深いものとなります。

写真 11　視点位置からの眺め

シークエンス景観における眺めの変化を論じているときに、立ち止まって見る眺め（シーン景観）を持ち出すのはおかしいのではないかと思う方もいるかもしれません。しかし、私たちが体験する眺めは、歩きながら見る眺めだけでなく、立ち止まって見る眺めもあります。シークエンス景観とシーン景観の両方を体験しています。たとえば、小石川後楽園や六義園などの回遊式の日本庭園では、苑路（歩道）を歩きながら眺めるとともに要所では立ち止まって眺めを楽しみます。移動しながら見る眺めと立ち止まって見る眺めの二つを楽しんでいます。山地の森林でも、この二つの眺めが必要なのです。

眺めに大きな変化をつけることは、眺めの印象を高めるだけでなく、別の大きな意味もあります。それは、山や川、人工物を見ることによって自分がどこにいるのかおおよそ分かるようになることです。**写真 9**（上）の樹林の眺めからは自分がどのような場所にいるのか分かりませんが、（下）の写真からは鬼怒川のすぐ近くにいることが分かります。つまり水面が見えることによって位置情報があたえられるのです。私たちは、常に自分がどこにいるのかを確かめています。仮にどこにいるのか分からなくなったら不安になります。山地では市街地とは違い案内板もないので、自分のいる位置を教えてくれるものを見たいのです。大きく変化する眺めはそれに応えるものです」。

まとめ

1　移動しながら見る眺めでは、同じ眺めが続くと単調になるので変化をつける必要がある。
2　眺めの小さな変化は印象に残らないので大きな変化が必要である。
3　眺められる対象の樹林に手を加えて眺めに大きな変化をつけるのは難しい。
4　山地の歩道沿線に視点を設けて、そこから見たいもの（山など）が見えるようにすると眺めに大きな変化が生じ、印象深い眺めになる。
5　山や人工物などが見えるようになると、見ている人は自分がどこにいるのかおおよそ分かるので、道しるべとしての眺めになる。

以上、シークエンス景観に配慮した整備について、その考え方を説明しました。さらに詳しくお知りになりたい方は拙著『森林景観づくり』をご覧になってください。

なお、森林部門技術士会のホームページのお知らせには、本稿のカラー版が掲載されていますので、是非そちらもご覧になってください。景観は見ることが重要です。

（よしだ　ゆきお）